

地理科学

59-2

GEOGRAPHICAL SCIENCES

Apr. 2004

研究ノート

イランにおける家内工業の地域性の消滅と

「絨毯モノカルチャ」の進展

——1956, 1966, 1976年センサスを基に—— 吉田 雄介 67

高知県土佐市の気温分布とその形成要因 武市 伸幸 88

フォーラム

場所の文法

——地理学における隠喩論と都市ガイドの分析—— ... 成瀬 厚 98

書評

伊藤達也・浅野敏久編：環境問題の現場から

——地理学的アプローチ—— 河本 大地 115

2003年度西南日本各大学地理学関係修士・卒業論文題目 118

学会記事 127

場 所 の 文 法

—地理学における隠喩論と都市ガイドの分析—

成 瀬 厚

キーワード： 隠喩， 比喩表現， 地名， 都市ガイド， 東京

I はじめに

本稿のタイトルはパーク (1982) の『動機の文法』から借りている。この著作は、このタイトルの中に還元できない多岐にわたる複雑な内容を含んでいるが、本稿のタイトルとして本書を引き合いに出しているのは以下の3つの理由からである。第1に、後に詳述するが、本稿で紹介する地理学における文彩に関する議論の発端の一つに本書が存在しているからである。第2に、このことについては本稿では詳細に議論する余裕はないが、パークの劇学¹ (dramatism) はゴッフマン (1974) と同様に社会を劇場の隠喩で捉えようとしたものであるが、本書の冒頭の議論〈場面—行為比率〉は人間の社会的行為を場所の問題として議論しているものであるからである。パークの著作は場所研究にとって重要であるといえる。そして第3の理由はそのタイトル中の「文法」という概念に関係している。この概念は本書のなかでは広義に用いられているが、本稿では、広義と狭義と双方で用いたい。すなわち、狭義としては、具体的な地理的記述における単語間を結び付ける文法レベルの隠喩作用を検討すること。広義としては、文法に基づく文章が多数集まった一つのテキストが場所という意味的統一体を生成する言語的作用を問題としているからである。この言語的作用のこ

とを広義の文法と呼ぶことができよう。

より具体的に、本稿の目的は「東京」という都市名を書名に冠した大衆文化的テキストを文法レベルで分析し、都市というスケールの場所が意味的統一体としていかに構築されるのかを探ることにある。それは筆者自身の論考 (Naruse, 1997) における固有名詞に関する議論を出発点とし、場所の商品化に関する議論 (成瀬, 1996) へと結び付けようという試みでもある。そのためにも、本稿の前半では「隠喩」概念に関する議論を整理することからはじめたい。というのも、隠喩概念は非常に多様に使用されており、それは多くの示唆を与えてくれるものの、地理学内での議論においては問題点も少なくない。この問題点に対する2つの批判、すなわち地理学史研究に限定されていたこと、隠喩概念を狭義にではなく広義に用いていたことの2点が本稿後半での具体的なテキスト分析の意図と方法を正当化してくれるであろう。

II 地理学における隠喩

記述的学問である地理学にとって、記述の問題、すなわち言語による比喩表現、修辞学、あるいは広義の隠喩の問題は1980年前後に重要視され、それについて議論されていた。ヒューマニスティック地理学として経験を重視することを主張した Tuan (1978) は、行動—感情—思

考という人間行為の軸に、記号—隠喩—象徴という軸を対応させた。また、Livingstone and Harrison (1980, 1981) は様々な場で用いられる空間的概念「フロンティア」を取り上げ、隠喩—神話—モデルという軸で地理学における哲学的問題を探求している。一方、リヴィングストンとハリソンにみられる一般的な隠喩理解が、隠喩に先行する字義通りの真実を前提としていると批判する Mills (1982) は、より相対主義的な立場から、西洋社会の環境に対する態度の歴史を辿っている。中世には自然を一冊の本と見做し、ルネサンス期には人間と同等の有機体、近代期には機械として理解する隠喩が支配的であったという¹⁾。

地理学の記述的側面を問い直すもう一つの流れが存在する。それは、厳密な真実に近づくと信じられていた科学の歴史を相対化するべく「パラダイム」概念を提示したクーン (1971) の議論を取り込んだ地理学史研究である。このことは野澤 (1992)²⁾ に詳しいのでここで論じる必要はないが、この研究の流れが隠喩概念と無縁でないことのみ簡単に説明しておきたい。『科学革命の構造』と同年に Black (1962) の『モデルと隠喩』が発表されている。そしてその後、科学における隠喩の役割についての議論が展開され、クーン (1981) も意見を寄せている。この頃、また別のシンポジウムが隠喩をめぐるなされ、その成果は『隠喩について』(Sacks ed., 1979) として発行されている。ここにはブラックも参加しており、哲学者のクワインやリクール、批評家のド・マンやグッドマンも参加し、議論を拡張させている。

1) ヘイドン・ホワイトによる言説分析の枠組

1990年代に入って再び盛んになってきた地理学における文彩をめぐる議論には歴史学の影響がある。歴史に関わる歴史的作品 (ミシュレ、ランケ、トクヴィル、ブルクハルトの歴史記述

とヘーゲル、マルクス、ニーチェ、クローチエの歴史哲学) を文学作品と同様に相対化し、その物語構造のプロット構成、議論の形式、イデオロギーの含意、比喩表現という側面から論じたヘイドン・ホワイトの『メタヒストリー』(White, 1973) は歴史学のなかでも衝撃を持って受け止められた (クレマー、1993; 富山, 1981)。本書におけるホワイトの方法はそれまでの米国の文学批評を背景としている。まず、プロット構成法に関してはフライ (1980) の『批評の解剖』から発想を借りている。この大著は複雑な内容を含んでいるが、ホワイトはプロット構成として、ロマンス、悲劇、喜劇、諷刺の4つの様式を引き出した。ペッパーの『世界仮説』(Pepper, 1942)³⁾ からは議論の形式として、形態論、機械論、有機体論、コンテクスト論⁴⁾ という4つの様式を援用している。さらに、米国ではないがマンハイム (1968) の『イデオロギーとユートピア』からは無政府主義、急進主義、保守主義、自由主義という4つのイデオロギーの含意を引き出した。ここまでの3つの4つ組みを組み合わせ、第1表に示したような、ホワイトの歴史記述形式の枠組が構築される。そして、引き続き論じられるもう一つの4つ組みが、パーク (1982) の『動機の文法』⁵⁾ を土台とした比喩表現 (trope) の理論である。4つの比喩表現とは、隠喩、換喩、提喩、反語である。そして、先に概観した「隠喩」概念をめぐる議論は、ここでいう比喩表現、あるいは文彩、修辞学という語でも置き換え可能な、人間が世界に対峙し、認識し、そして表現する方法をめぐる、人文・社会科学全般に共通する議論であるといえることができる。

歴史学者として歴史学そのもののあり方を問おうとして「メタ歴史」なるタイトルをつけたホワイトに対して、メタ地理学的な研究も地理学者によって1990年代以降なされるようになってきた。経済地理学からは Barnes (1992) が、

第1表 ホワイトによる歴史記述・歴史哲学分析の枠組

プロット化の様式 Emplotment	議論の様式 Argument	イデオロギー的含意の様式 Ideological Implication
ロマンス的 Romantic	形態論 Formist	無政府主義 Anarchist
悲劇的 Tragic	機械論 Mechanistic	急進主義 Radical
喜劇的 Comic	有機体論 Orgnicist	保守主義 Conservative
風刺的 Satirical	コンテクスト論 Contextualist	自由主義 Liberal

出典：White, 1973, p. 29 富山, 1981, p. 72の日本語訳も参照した

テキスト概念の定義をホワイトには言及せずに歴史学者ラカブラ (1993) に依拠しながら、新古典派の経済学が物理学の隠喩を用い、マルクス主義経済学が生物学の隠喩を用いてきたことを示唆している。都市社会学から都市論に至る都市記述を分析の対象としたのは Duncan (1996) である。シカゴ学派の社会学者パーゼス (1972) による、よく知られた同心円モデルとしての都市記述は、人間生態学の名にもあるように、都市を生きた有機体とみなすことで、客観的で科学的なものにしようとしたという。デイヴィス (2001) による都市ロサンゼルス・マルクスの資本主義分析⁶⁾ は、提喩による悲劇的な様式に基づくという。最後に取り上げられるのはバルト (1974) による『表徴の帝国』である。このアイロニーに満ちた、ポスト構造主義的な文学的虚構としての日本、あるいは東京の記述は、ほとんどの都市記述が前提としている都市の統一性を批判し、彼の文体の戦略 (断章) と同様に都市の断片を賞賛する。

また、直接この文脈には位置しないが、Daniels and Cosgrove (1993) は近年の文化地理学における景観研究で採用されているスペクタクル、あるいは劇場とテキストという概念をある種の隠喩とみなし、その歴史を辿っている。コスグローヴは16世紀ヴェネツィアにおける2枚のサン・マルク広場の景観画を取り上げ、スペクタクルと劇場について論じ、ダニエルズは19世紀英国ジョージ朝時代におけるジェーン・

オースティン『マンズフィールド・パーク』(1813年) から劇場とテキストについて論じた⁷⁾。ホワイト流の分析は歴史的作品をあえて歴史的に解釈しないことに意義があるが、ダンカン流のポスト構造主義的解釈には、コスグローヴ流の美術史に基礎をおく歴史分析を対峙させておく必要がある。それから、ついではないが、近年の社会・文化理論のなかで用いられる空間的用語を検討し、その隠喩的利用を論じた Smith and Katz (1993) の論考⁸⁾ にも言及しておこう。

ホワイトの『メタヒストリー』に匹敵する、地理学者による成果は Buttimer (1993) によるものであろう。1993年に発表された『地理学と人間精神』は古代ギリシャ時代の自然哲学から現代の現役地理学者まで、広義の地理思想史と現代社会における地理学者の役割を探索したものである。まず、ホワイトと同様に地理学テキストに対してベッパの基根隠喩理論を援用するが、地理学的に変更が加えられる。形態論 (formism)、すなわち対象の形態学に対応するものを土地の形態学、すなわちモザイクあるいは地図 (mosaic or map) に置き換える。機械論と有機体論はそのまま⁹⁾、コンテクスト論 (contextualism) は本書のキーワードであるアリーナ (arena) 概念に置き換えられる¹⁰⁾。次に、地理学研究の「意味」について、ギリシャ語の単語4つを提示する。ポエシスは人間の本性に、ロゴスは知識に、パイディアは教育、

エルゴンは社会的行動に対応する。また地理学者の研究環境 (milieu) について、アイデンティティ、秩序、ニッチ、目録、という4つ組みを提示する。こうした枠組は主に個々のテキストの解釈に与するものであった。バッティマーが更に付け加えたのが、複数の、あるいは無数のテキストの関係、あるいは流れを理解するための概念であり、それは紀元前の神話劇から引き出した、フェニックス、ファウスト、ナルキッソスである。これは、19世紀前半の有機体説生成の渦中で人間性の3段階の発展を唱えたコント (1970) の発展史観とは異なる、物語的なものであり、「再帰的パターンに従うものである」(Buttimer, 1993, p. 41)。フェニックスとは灰から飛び立つ不死鳥であり、抑圧から新しい思考が生成し、解放へと向かう様子。ファウストは生成された思考を学説としてその構造を建設し、制度的に維持し再生産する過程。ナルキッソスはその後生じる緊張と矛盾の状況下での内省的雰囲気の意味している。このような枠組で、地理思想史の長い歴史を辿り、最後にアメリカのプラグマティズムを参照することで、地理学の実践的な社会的役割を提言し、地理学におけるヒューマニズムの再生が新たなフェニックスの前触れになることを示唆している。

こうした地理学のホワイト流言説分析に新た

な視点を提供したのが Smith (1996) による論考である。諷刺 (satirical) を皮肉 (irony) に置き換えるが、スミスもやはりフライによる4つのプロット様式とパークの4つの比喩表現を枠組とし、19世紀末から100年にわたる地理学テキストを取り上げ、解釈を加える。スミスはバッティマーと異なり、学説の歴史的な流れを無視しているが、新たに加えられた視点が読者の問題である。ホワイトに端を発するここまで紹介してきた研究は、従来の学史研究がその内容を主たる対象にしていたのに対し、テキストの形式に着目し、形式と内容との関係、そしてその意図や含意、すなわちイデオロギーの問題を提起した。しかし、その関心はあくまでもテキスト生産の側にあった。スミスは、ホワイトが論じたような3つの4つ組み同士の関係についての関心は薄い。この論文の主題とした。そもそも、この種の言説分析は科学的な手続きを経ようと、あらゆるテキストが絶対的な価値を持ちえないという前提であるが故に、特定のテキストは相対的に立場の異なる読者にとって異なった意味を持つというのが、スミスの主張である。2つの4つ組みに基づくテキストと読者の関係を第2、3表にまとめたが、これは机上の推論にすぎない。しかし、誌上で繰り広げられる具体的な論争の

第2表 物語様式に基づくテキストと読者の関係

		客体の様式 (テキスト)			
		ロマンス的 (解放)	悲劇的 (断念)	喜劇的 (調和)	皮肉 (移転)
主体の様式 (読者)	ロマンス的 (解放)	妥当	保守的	小心 想像力のなさ	冷笑的
	悲劇的 (断念)	理想的 非現実的	妥当	従順な	気紛れ 危険な欺き
	喜劇的 (調和)	混乱 無頓着	悲観的 陰鬱	妥当	疎外 憤慨
	皮肉 (移転)	自己誇大	うぬぼれ	愚直	妥当

出典：Smith, 1996, p. 10, Table 1. を簡素化したもの

第3表 代表的比喩表現に基づくテキストと読者の関係

		客体の様式 (テキスト)			
		隠喩 (比較)	換喩 (構成)	提喩 (文脈)	反語 (対照)
主体の 様式 (読者)	隠喩 (比較)	妥当	知ったかぶり	不明瞭 度が過ぎる	つむじ曲り
	換喩 (構成)	表面的	妥当	疑わしい	軽蔑的
	提喩 (文脈)	平凡な	還元主義	妥当	気の毒な
	反語 (対照)	人を欺く	詐欺的	非常識な	妥当

出典：Smith, 1996, p. 15, Table 2. を簡素化したもの

分析を通じて研究者間に生じるポリテクスの理解を深めるためにこの視点は有用かもしれない¹¹⁾。

2) 隠喩についての説明, その空間的隠喩

ここまで取り上げた文献の基礎には, 新たな事実を伝えたり, 新たな考え方や視点を説明する際の修辞法としての隠喩概念がある。初期の論者は「隠喩的過程とは人間の想像力と思考の基礎として位置する」(Tuan, 1978, p. 366) や「隠喩, 神話, モデルによる言語的歪曲がなければ発見や進展はない」(Livingstone and Harrison, 1981, p. 106) と述べ, 新しい知的発見や科学的発展に欠くことのできない想像力と見做すことで隠喩概念の重要性を指摘している。近年の論者も共通して, 「親しみのある領域から親しみのない領域へと」(Duncan, 1996, p. 254) 移行することを可能とする, あるいは「隠喩的表象は親しみを増すことを意味する」(Smith, 1996, p. 12) などと主張している。これらの論考の主眼は学問としての地理学における記述の在り方を検討するものであり, 学的表象においても隠喩や文彩などが無駄な装飾などではなく, 「隠喩は合理性の中心であり, 『真実』構築の中心である」(Cresswell, 1997, p. 333)¹²⁾ という認識を必要としている。バツティマーが採用したペッパーの基根隠喩も含め, これらの論考における隠喩概念はテキストの全

体的な特徴を捉えるためのものであり, Barnes and Duncan (1992, p. 12) の言葉を借りれば, 小さな隠喩に対する大きな隠喩であり, 修辞学 (rhetoric) や比喩表現 (trope), 文彩 (figure) などと重なる広い意味で用いられていたといえる。

それでは, ここでいう「小さな隠喩」とはなんだろうか。それはパークが「代表的」として提示し, ホホワイトが採用した4つの比喩表現——隠喩, 換喩, 提喩, 反語——のうちの1つである¹³⁾。第4表にまとめたように, パークとホホワイト, そして地理学者スミスがこれらの比喩表現から引き出した含意はそれぞれ違っている。もう少し詳しくその含意をみてみよう。パークは「隠喩とは『あれ』のなかにある『これ性』を, あるいは『これ』のなかにある『あれ性』を引き出す。…Bの視点からAを見ることは, Aを眺める展望としてBを使用することである」(パーク, 1994, p. 400) と説明し, ホホワイトは「隠喩 (文字通りには「転移」) においては, 複数の現象はお互いの類似性や差異と関

第4表 各論者による代表的比喩表現の含意

	代表的比喩表現			
	隠喩	換喩	提喩	反語
パーク	展望	還元	表象	弁証法
ホホワイト	表象	還元	統合	否定
スミス	比較	構成	文脈	対照

連して特徴づけられる」(White, 1973, p. 34)と書く。次に、「換喩の基本戦略はこうである。肉体を持たず触れることのできない状態を実体的な言葉で伝達すること」(パーク, 1994, p. 404),あるいは、「換喩(文字通りには「名前の変化」)を通じて、モノの部分の名前は全体の名前で置き換えられる」(White, 1973, p. 34)。そして、換喩が質から量への変換であるのに対し、提喩は相互に変換可能であるような関係であり、提喩によって、「ある現象はその全体を仮定するようなある『性質』を象徴するような部分を用いて特徴づけられる」(White, 1973, p. 34)。

このように提示された比喩表現の含意は、言葉と事実が対応するのではなく、ある事実を認識するために他の言葉を参照することで理解するという言語体系を改めて認識させてくれる。しかし、こうした比喩表現の名称も他の言葉によって分かりやすく説明しようという試みそれ自体は比喩的である。リクール(1984, p. 13)の言葉を用いれば、「隠喩という語そのものが隠喩的である」。さらにいえば、意味の遠さや近さ、置き換え(displacement)、転移(transfer)、展望=遠近法(perspective)など、比喩表現を説明するために用いられている語が空間的であり、言語体系自体が空間的に理解されているといえる。こうしたものは、再びリクールの言葉によれば「隠喩に関する空間的隠喩」(Ricoeur, 1979, p. 143)といえる。こうした言語表現の特質は、「空間を占めていない諸現象を空間内に併置しようとこだわる」(ベルグソン, 1975, p. 13)人間精神の特徴による。しかし、ここでいう「空間」とは絶対的な意味を持つ類の概念ではなく、「空間が等質のものとして定義されるべきであるとすれば逆に全ての等質的で無規定の環境は空間となるように思われる」(ベルグソン, 1975, p. 94)という相対的な概念である。

隠喩が分かりやすい説明のために想像力に訴

えることだとするならば、そして想像すること(image)が視覚的画像を意味するのならば、隠喩に関する分かりやすい説明も視覚的画像に置き換えることができるような空間的な隠喩となることは避けられないのだろうか。このことについて身を持って訴えかけてくるのはデリダ(1987)の「隠喩の退-引」¹⁴⁾である。「*Μεταφορά* [隠喩・移送]が市街を往来する、あたかもわれわれが街の住人[habitant]であるかのよう、それは街のあちこちへわれわれを乗せて運んでくれる[vehicule]。ありとあらゆる道筋[trajet]を辿り、十字路や赤信号、進入禁止[sens interdits: 禁じられた意味]、[道路の]交差[intersection: 交叉]ないしは交差点[croisement: 交錯]、スピード制限や命令法規に伴われつつ」(デリダ, 1987, p. 32)。「隠喩とは何か」という問いに対して「隠喩は隠喩である」では回答にはならない。このような問いは必然的に別の表現を求めている。デリダは隠喩に関する説明が必然的に隠喩的になることを極端な空間的隠喩でアイロニックに表現した。しかも、デリダがギリシャ語やドイツ語なども駆使していることに配慮して訳者が原語と複数の訳語をあてているように、空間的用語として選択された語は空間的な物質性を示す語であると同時に言語学的・文法的な意味も有している。文法上の「条り(passages)」とは「通路」のことでもある。デリダのこの表現を私は過度な隠喩によるアイロニーと表現したが、精確に言えば正しくない。個々の語自体が多様な意味を持つのであって、本来の意味や言い換えなどはそもそもありえないのである。「もし存在について[a son sujet] 隠喩的に語れないのであれば、本来のないし字義通りにもやはり語れないわけである」(デリダ, 1987, p. 205)。

同じことはデイヴィッドソン(1987)によってより端的に表現されている。隠喩に関するシンポジウムにおける問題提起的な報告で、その

後の議論にも大きな影響を与えたのが彼の論文「隠喩とは何を意味するのか」である。この問いに対する回答は「隠喩の意味はまさにその字義そのものなのである」(デイヴィッドソン, 1987, p. 65)である。この冒頭でデイヴィッドソン(1987, p. 49)は「隠喩は言語の夢の仕事(dreamwork)である。したがってその解釈には、全ての夢の仕事と同様、創作者と共に解釈者が大きな関わりを持っている」といっている。これはフロイトからの大きな影響もある近年の批評におけるテキスト解釈と共通する主張であり、テキストの絶対性を否定するのと同様、一つの語、一つの文が想像力を要しない絶対的な「字義的」意味を有するという考え方を否定している。語のそうした本質は夢と同様、「嘘」という極端な意味作用を持つ表現に見出せるという。もちろん、こうした考え方に立つ場合、嘘という概念自体が所与のものではなく、本当という概念の存在を前提としている(あるいは虚構と真実という対立)。

さて、論点が多少ずれてきているようなので話を戻したい。この論点のずれは他にもない、ここまで言及した地理学者による議論はあくまで地理学者という非常に限定された記述主体の言語表現に関するものであったことにも関係する。すなわち、彼/彼女たちの研究は、地理学者による言葉の分析であるがゆえに地理学研究としての正当性を有していたのである。当然地理学者による作品が対象であるから、その記述の多くは地理的記述であるわけだが、必ずしも全ての論者が地理的記述の本質を探究していたとはいいがたい。そして同時に、その分析対象のテキスト群は、今日でも名を残している先駆的な作品であったり、当時の学説を確立するようなテキスト性豊かなものであった。私が継続的に主題としているより広い意味での地理的記述をめぐる問題を探求するにはあまりにも特殊な記述主体とテキストであるといわざるをえない。

そうした意味において、大衆的な言説を分析対象にしたクレスウェルの論考はより筆者の関心に近い。ただし隠喩の理解は他の著者たちと共通している広義のそれである。本稿の後半では、現代日本で出版された外国人に対しても向けられた特定の東京ガイドブックを事例に、狭義の隠喩、すなわち文単位の分析を行うことで、単語同士の結び付きのあり方を通じてより大きな地理的記述へと達するのか、検証することとしたい。

III 隠喩が構築する場所

1) 隠喩論から記号論へ

ここまでみてきたように、隠喩概念はそれ自体隠喩的なものにならざるをえないため、それを具体的な分析において操作的に用いることはできない。しかし、隠喩は言語分析において無視できる存在なのではなく、逆に改めて概念化する必要もないほど根源的な力であるといえる。上述したように、本稿の出発点には筆者の1997年の論考があるが、そこでは固有名詞論とポスト構造主義的記号論を参照することを通じて、地名を伴って他者から名指しされる場所という存在が、他の記号と同様に、本質を持たない空隙の周りを記号表現のみが戯れる存在であることを示唆した。しかし、そこで残された課題が、多数の記号表現がなぜ、どのような力でその空隙の周りを戯れるのか、という問題であった。その空隙の代わりとなるのが純粋な記号表現としての固有名詞である。そして名詞に他のさまざまな単語を結び付けるのが「文法」という制度であり、その原動力を「隠喩」と呼ぶことができる。

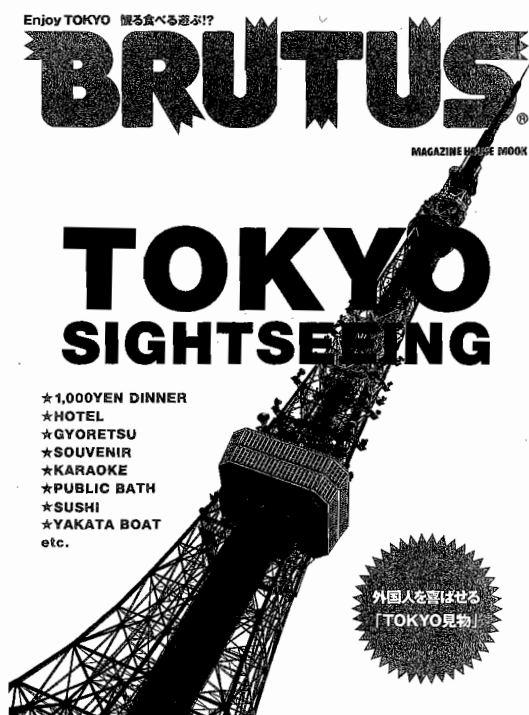
すなわち、ジジエク(1996, p. 82)は隠喩を「大文字のゼロを大文字の一者として数えさせる現動」として定義し、デリダ(1972, p. 253)もまた、「隠喩は記号表現の戯れとして存在する以前の観念、あるいは意味(こういってよけれ

ば記号内容)の過程として理解されねばならない」というものである。隠喩を改めてこのように理解し、具体的な地理的記述の素材を用いて検証していきたい。よって、本稿では「狭義の隠喩」を分析の基礎とするだけでなく、より抽象度を高めた概念として「隠喩」を捉えている。

2) 対象テキストの性格と分析方法

本章で分析の対象とするテキストは、マガジンハウス社から雑誌『BRUTUS』の特別編として2002年6月30日に発行された『TOKYO SIGHTSEEING』である。A5版フルカラーで103頁、税別価格933円である¹⁵⁾(第1図)。日本語目次を下に示すと、

- ・初めて訪れた外国人を喜ばせる「TOKYO見物」
- ・「東京」の正しい動き方、グリーン車、オパチャン!?



第1図 分析対象とした『TOKYO SIGHTSEEING』
(マガジンハウス社, 2002年)

- ・ホテル, アミューズメント, 眺めのいい風呂, マンション, コーヒー
- ・ステーキ, トンカツ, イタリアン, 和食
- ・日本の伝統芸!?! フィギュア大集合
- ・世界のファッションセレブが通う作業着専門店, 釣り堀
- ・無印良品, ビックカメラ, スターバックス, カフェ, ZERO GATE
- ・行列大好き! ヘッド・ポーター, 寿司の美登利, メゾン・カイザー
- ・もんじゃ+屋形船, ネイルサロン+バー
- ・回転寿司, 死んでるネタ・生きているネタ
- ・「通」に見える, B級グルメ専門用語集
- ・築地の名物寿司店&喫茶店
- ・最新ホテル情報

とあるように、ガイドブック専門出版社による真面目な都市ガイドとは異なり、構成はいたってマガジンハウスのようなものである。そして、『TOKYO SNAP』として所々に挿入されるのは、お台場、銀座、表参道、東京、新宿、渋谷、浜離宮、代官山、六本木、西麻布、中目黒、恵比寿、といった街であり、特定の美的価値観によって選別されている。

この冊子はどんな読者を想定しているのだろうか。外国人名複数人から協力を得ているとはいえ、全ての文章は日本人の記者の手によるものであることが記載されている。これまでの筆者流の分析に従えば、その想定読者やテキストの全体性を考慮するところだが、本稿では日本語と英語の併記という特徴を利用した「記述の石切り場」としてこのテキストを使用する。

具体的なその分析法は、ロラン・バルトが1958年6月から1959年6月までの『Elle』と『Jardin des Modes』という2つの雑誌から切り出した記述の分析を通して、フランス・モードの言語表現を探求した『モードの体系』(バルト, 1972)を参考にしている。この大著を要約する

ことは容易でないが、「モード」という大義を背負ったジャーナリストたちが特定の衣服がいかにモードであるのかを言語によって説明する、その方法を単語（衣服に関する名詞や形容詞、衣服以外の事物を示す名詞）と文法のレベル（個々の単語が文章中でどう結び付くのか）から探求している。そこで見出された文章の構造は、各単語の文法的概念（名詞、動詞、形容詞）ではなく、「意味作用の目標とされる《対象》[object] と、意味作用をささえる《支持項》[support] と、まさに変異する第3の要素つまり《変異項》[variant]」という概念によって説明され、これらが結び付いて成り立つ「この意味作用の単位を《母型〔マトリクス〕》[matrice] と呼ぶことにしよう」（バルト, 1972, p. 89）という。

本稿の分析には隠喩概念が念頭にはあるが、内田（1993）のように個々の文章を比喩表現の類型に当てはめることがここでの目的ではない。むしろ、これまで私がすすめてきた記述的分析を文レベルで行うことになるが、それはここで一つの方法として提示できるような物象化された、形式化されたものではなく、あくまでも分析の実践を通してのみ提示できるものである。もちろん、バルトの『モードの体系』における分析は隠喩概念と無縁ではない。「論理的にいて、法〔現実〕を事実〔神話〕に変形する手だてとしては、隠喩しかないはずだ。（中略）みずからの法を告白する際のモードのことは隠喩である。（中略）モードは現実に対してはわざわざ隠喩による誇張法を与え、隠喩には現実的明証性の確認という単純性を与える」（バルト, 1972, p. 374）。

3) 地理的一般名詞

まずは地理的実在物に用いられる一般名詞をテキストのなかから抜き出してみよう。

(1) ... the city still has its mysteries,

eccentricities... (p. 8)

(2) 東京はあらゆるカルチャーが街中に混在している不思議な都市です。(p. 88)

the city とは当然東京のことである。東京を言い換える場合はほとんどが the city に統一されているが、他にも、面積がメキシコ市に次いで世界2位だという場合に metropolis (p. 9) を用い、寿司のチェーン店が都内で5店舗展開しているという場合に Tokyo area (p. 64), 日本各地には独自のラーメンが存在するという場合に Each region of Japan (p. 91) という表現が用いられている。(1) の文章における「持つ has」という表現は擬人法とは限らない。動詞 have はどの語義が字義通りと判断できないほど多様な用法がある。ただし、ここで確認できるは、この広範な動詞を用いて、都市という存在が形容詞の名詞形である性質を「有する」とされていることである。

さて、私が女性週刊誌『Hanako』の分析を通して確認したように（成瀬, 1996）、東京という全体としての都市はその下位にさまざまな街を有しており、実践的に都市使用者はこれらの街を複数経験することで都市全体を理解する、とこうした情報の生産者は認識している。

(3) The trendy areas of Tokyo... (p. 34)

(4) *Monjayaki* is a much-loved dish typical of the city's *Shitamachi* (old downtown) area. (p. 72)

(5) Daikanyama is a charming area. (p. 79)

街には様々な一般名詞が用いられるが、まずは area という語をみてみよう。(3) からは街が東京に複数含まれることを示しており、(4) ではそれらが固有名詞としての地名を含むのみならず、「下町」という一般名詞で指示されるより広域にも用いられる。(5) では area という語に限らないが、まさに地名という固有名詞が be 動

詞によって、形容詞を伴って結び付けられている。「固有名詞は、《形容詞》または述語のちりばめを伴って生み出されるのだ」(ド・セルトー, 1996, p. 294)¹⁶⁾。

この(5)の事例と同様に用いられているのは *district* と *town* の語である。

- (6) ... the entertainment district of Nishi-azabu, Roppongi and Azabu-juban. (p. 11)
- (7) Nakameguro is something like New York's Nolita district. (p. 83)
- (8) Shinjuku is four different towns in one Head west into the land of skyscraper, ... (p. 45)
- (9) ... perfect for snack after a night on the town. (p. 81)
- (10) 眠らぬ街, 新宿 (p. 41)

(6) と (9) はほぼ同様の用法だが、*district* の方が広範のようである。ちなみに、(9) は六本木を指している。(7) は東京以外の都市と比較した典型例である。日本語では「ニューヨークでいえば、ノリータみたいな空気感を持つ街が中目黒」(p. 83) とある。東京とニューヨークの関係と中目黒とノリータの関係が相似をなすとみなされている。ほぼ同じ用法だが、表参道のような街路名が街として認識されている場合は *street* の語も用いられる (p. 35)。(8) の事例は多少興味深い。英語表現では一つの頭が東西南北で違った特徴を持つ4つの街を有しているといい、日本語では新宿を「いろんな顔を持っています」(p. 45) と表現される。双方併せて隠喩が完成するのだろうか。

一般名詞の考察の最後に、場所そのものの語 *place* の事例をみてみよう。

- (11) ... the *sentō* is a place for neighbors to socialize, ... (p. 17)

- (12) They also happen to be a great place to catch a snooze, ... (p. 19)
- (13) A simple place to bed for the night. (p. 39)
- (14) Walking through Tsukiji you'll discover over 39 different places to eat... (p. 94)
- (15) ... the best way to discover new places is by exploring them on foot... (p. 9)
- (16) 日本の下町情緒が味わえる場所 (p. 13)
- (17) 東京は現在、いろんな場所で再開発が繰り広げられており, (p. 18)

place の語は、(11) で銭湯、(12) で喫茶店、(13) でカプセルホテルを指示しており、英語の *place* は何か行為を行う施設を指し示す場合が多い。日本語でも、(16) のように谷中にある特定の日本旅館を指示する場合に用いられた。(17) は英語に当てはめれば *site* のような位置を指し示す用法。(14) も食事処を指示しているが、(15) とはスケールが違うが同様に用いられる。

4) スケール規則を乱す例外

- (18) When Tokyoites speak of "Tokyo", they mean the area around Tokyo Station. ... Practical, functional and soulless, there's really not a lot to see. (p. 44)

東京の内部で生活する者にとって、都市としての東京を意識する機会は少ない。だから、東京人にとっての「東京」とは東京駅周辺の地区である。しかも「ただのオフィス街」(p. 44)。バルトは日本、あるいは東京という都市の記号論のなかで、「この都市は中心を持っている。だがその中心は空虚である」(バルト, 1974, p. 43) と書くことで、記号表現の戯れという記号の本質として虚構の都市を描いた。その空虚なる中心は皇居であったが、ここでいう「東京」で考えても記号の本質により近づくかもしれな

い。「東京(駅)」とは都市東京のなかで唯一名詞的に「東京」と呼ばれるものであり、意味的統一体としての都市東京にとっての固有名詞の役割を果たす。皇居は確かに空虚であり、記号のゼロ度を意味する。一方で「東京」は言語的機能を有している。具体的に指し示すというだけでなく、固有名詞が文法の力で多くの属性を結び付けるように、鉄道交通の要、労働者の勤務地として多くの人間を集約する¹⁷⁾。しかし、(18)にあるように、観光客にとっての都市東京の魅力をほとんど有していないとされる¹⁸⁾。都市観光において、「東京」は地点としては最重要の機能を果たしながら意味的には重要とはみなされない。このことは、トマス・モアが『ユートピア』のなかで完全に近い共和国を描きながらも、それを指示する固有名詞「ユートピア=非-場所」では場所の存在自体が否定されているという事態と類似している(マラン, 1995)。

そして、前節の考察でも確認できたように、都市東京における街「東京」の位置、あるいは記号における固有名詞の役割と同様に、場所(place)概念は地理的言説のなかで特異な役割を担っている。place to eat や take place のようにほんの何気ない場面で現れる一方で、われわれ社会学者がこだわるような意味においてこの語そのものは出現しない。place よりも多少具体性を帯びた一般名詞 city や area などが代替する。地理的言説においては固有名詞と一般名詞と二分するだけでは理解は深まらない。固有名詞としての地名のなかにも一般的な土地の特性を指し示す一般的なものもあれば、地理的実在を指し示す様々な一般名詞も抽象の度合いが異なると同時に、地図的認識におけるスケールの問題も存在する。

5) 媒介としての日本

行為としての具体性に東京という都市スケールの意味は入り込みにくい。具体性と抽象性の

度合いが中途半端なのだ。そこで、この種のテキストに入り込みやすいのがより抽象度の高い「日本」である。日本的なものは具体的な行為に関する文章のなかにダイレクトに組み込まれる。

- (19) ... *obachan* are a part of Japanese culture. (p. 11)
- (20) Enjoy an authentic Japanese summer evening here with beer and soybeans after your bath. (p. 15)
- (21) Just about all Japanese, from salarymen to high school girls to housewives, really get into *karaoke*. (p. 42)

ステレオタイプ化された典型的な行動様式は、やはり様々な多様性を捨象して成り立つ表現である国民文化と相性がよい。都市としての「東京」そのものは具体的な行動の場には現れず、行動の前提として登場するにすぎない。しかし、この都市ガイドは外国人をも読者として想定しているため、その東京案内は日本案内をも含んでいる、あるいは等価であると考えてよい。このガイドブックは、「東京にきたら何をすべきか」を動機としているが、場合によっては「日本」を持ち出しても事足りる。

東京を銘打ったこの都市ガイドは「東京を経験すること」を大義にしているといえるが、(7)のように東京を世界都市としてパリやニューヨーク、メキシコシティと比較することはあっても、日本の他の都市と比較して東京であることを強調することはない。地図上の認識からすれば、スケールの大きい方から世界—日本—都市としての東京—街としての東京(八重洲や丸の内)、という包含関係となり、修辞学的には部分と全体という換喩の関係となるが、記号上の認識ではその限りではない。「東京」という固有名詞は地理的実在物という一般名詞に属する他の固有名詞と等価にあり、文脈に応じて多数の固有名詞の集合からなる差異の体系のなかで固

有性を獲得する¹⁹⁾。

都市としての東京に居住するものであれば「東京」といえば、新宿や渋谷など鉄道駅名と一致する街々の差異の体系のなかで東京駅周辺の区域を指示し、日本の他の都市に居住するものであれば東日本の一都市としての東京を指示するであろうか。日本に精通していない外国人であれば日本の首都として、日本の他の都市や農村地域を全く意識に上らせることなく、日本と記号的な等価物としての東京を指示するかもしれない²⁰⁾。

6) バルト的考察

最後に、よりバルトの分析に引き付けて、これまでの文章を検討してみよう。もう一度繰り返すと、フランスのモード雑誌は「モードである」という価値を大義とし、衣服に関する記述を生産する。この記述は、ブラウスやスカートなど特定の商品を含んでおり、これをバルトは《対象》と呼んだ。そしてその色彩や形態がこの対象を特徴づけ、多くの場合対象の要素となるものが《支持項》であり、その性質が《変異項》である。

ゆったりとしたブラウスがあなたのスカートにロマンティックな様子を与えることでしよう。(バルト, 1972, p. 91)

この例文では「スカート」が《対象》、「ブラウス」が《支持項》、「ゆったりとした」が《変異項》となり、ロマンティズムという価値へと導く。絶対的な価値である大義「モードである」は特定の文章からは隠れている。

このガイドブックの大義は「東京を経験すること」である。モードとは異なり、地理的記述においては、(1) や (2) のように抽象的なレベルで東京について記述可能である。しかし、大半は具体的な行動に関する記述であり、それはよりローカルな街を行為の文脈としている。特

定の文章においては「街」が《対象》、その構成要素が《支持項》、行為や属性が《変異項》となる。例えば (9) と同じ頁の日本語表現には「外国人の多い回転寿司は、六本木にあり。」とある。この文は形式的には《母型》を成しているようだが、この文章ではこのテキストの大義「東京の経験」には直接結び付かない。理想的には、どの街(対象)のどんな施設(支持項)で、なにをするか(変異項)ということがまさに東京的な振る舞い、あるいは「東京的なもの」を経験することである、と「モードの体系」と同形の記号学的構造を想定することができる。

しかし、本稿で対象とした『TOKYO SIGHT-SEEING』には、この書物のなかに印刷された多くの文章を結びつける体系は確たるものとはいえない。むしろ、それが地理的記述の特徴なのかもしれない。「モードである」ものを吸収し、「モードでないもの」を排斥する大きな言説の力はここでは働かない。都市を指し示す「東京」という固有名は行政界を無効にするし、雑多であることを「東京的なもの」とみなしたりする。

IV おわりに

本稿は短いながら2部構成となっている。1部であるⅡ章は、本来学史研究の一つの流れとしてレビュー論文とされるか、具体的な学史研究の序文として言及されるべきであるが、あえてそうはしていない。それはもちろん、筆者が学史研究者でないことにもあるが、学史的研究から生まれてきた発想をより広範な地理的記述の分析に応用すべきであることを主張したいのと同時に、そこにはらむ問題をも提起したかったからに他ならない。また2部であるⅢ章は本来ならば、ツーリズム研究の一環として、日本の地理学ではまだ蓄積の少ないガイドブック研究として、一つのテキストを多面的に詳細に分析する必要があったと思う。しかし、本稿ではより広い一般的な地理的記述についての議論を

展開するためにこのテキストを用いている。

本稿で対象としたテキストは、頻繁に地理的な特集を組む雑誌『BRUTUS』²¹⁾による東京ガイドであり、その記述の特質は雑誌的なものと観光ガイド的なものを併せ持っている。東京という都市を記述の対象とし、外国人を対象読者に生産されたこのテキストは、国から施設まで大小様々な地理的対象物が、固有名詞から一般名詞までの幅を持つ名によって指示される文によって構成されている。

一般名詞としての place は、具体的な行為の場として使用される。そして、街としての固有名詞（お台場、渋谷、六本木など）は公共交通の目的地として、あるいは周遊の範囲として用いられる。この種の情報誌が推し進める都市のなかの消費行動において、個々の行動を意味付けるのは行為そのものではなく場所の意味である。その意味で、「人間と場所との間に提喩的關係が成立する〈場面-行為者比率 scene-agent ratio〉」（パーク, 1982, p. 33）は場面側に比重が大きい。このような個々の行為・行動に関する記述のなかでは、都市としての東京が立ち現れることはない。

一方、外国人ツーリストが直面する単なる驚きが文化的差異として認識され、ある場合には想像上創られた驚きが定式化し決まり文句と化し、ここに国民文化が登場する。国民文化は地図的認識とは別の次元の抽象度を持つため、スケールの小さい地理的単位の名称ほど身近な行動を示す文に入り込みやすいという常識を無視して使われる。

こうして上下から挟まれる形で、東京は都市という一般名詞と置き換え可能な固有名詞としてテキストの表題の位置を占め、「大文字の主人の-記号表現 *Mater-Signifier*」（ジジエク, 1996, p. 37）となりうる。

本稿のⅡ章は、1998年12月に東京都立大学大学院理学研究科に提出した筆者の博士論文「The politics of

representing places and world」における「2.2 Rhetorical manner」の部分を利用したものである。

また、Ⅲ章の内容は、2003年9月20日に慶応大学日吉キャンパスで開催された関東都市学会例会で報告したものである。

注

- 1) ここまでの地理学における隠喩に関する議論は内田（1993）によって簡単に紹介されている。
- 2) 実際にパラダイム概念を援用した立岡（1985）も参照されたい。
- 3) ホワイトが議論様式と呼んだこのペッパーの理論を、自ら「基根隠喩 root metaphor」と呼んでいる。なお、Livingstone and Harrison（1981）とMills（1982）でも本書が言及されている。ペッパーの議論の概要は日本語でも読むことができる（ペッパー, 1987）。
- 4) 原語は Formist, Mechanistic, Organicist, Contextualist である。Formist に富山は「個体論的」の訳語をあて（富山, 1981, p. 72）、永山は「形相型」をあてている（ペッパー, 1987, p. 158）。これはロシア・フォルマリズムにあてられる「形式」の語を避けているためと考えられる。ここでは、バットイマーの理解をヒントに「形態論」の訳語をあてたが、ゲーテ流の「形態学 Morphology」との混同をここで注意しておきたい。また、Contextualist についても、Berdoulay（1981）によるコンテクスト理解とは異なっていることを注意したい。
- 5) 本書の日本語訳（パーク, 1982）には比喩表現について論じた文章「アイロニーと弁証法」は含まれていない。1989年に編集された論集（パーク, 1994）に訳出されている。
- 6) ダンカンが言及しているのは実際にこの著作ではなく、1993年の論文であるが、この論文のタイトルからしても、この著作の第4章と類似した内容だと思われる。
- 7) オースティン作品『マンスフィールド・パーク』の地理的含意についてはサイド（1998）も参照されたい。
- 8) この論文の冒頭に引用されているルフェーブルの文章を同じく冒頭に引用した加藤・神田（1999）は、この論文を出発点としているといってもよい。
- 9) 厳密に言えば、ペッパーの organicism に対し、バットイマーは organism を充てている。

- 10) 若林 (1999, pp. 246-248) はその著書の最終章の「展望」としてベッパのルート・メタファーの概念に言及し、バッチェラーの著作にも触れている。著者によれば近年、心理学においてもベッパの隠喩論が援用されているという。
- 11) 例えば、泉谷 (2003) のような試みにこの言説分析の方法を用いれば、また異なった解釈が可能になるかもしれない。
- 12) ただし、このクレスウェルの論文のみは例外的に学史研究には含まれない。
- 13) このパークの文章の意図が単なる比喩表現の分類でないことには留意しておこう。「私のここでの主たる関心は比喩としての使用法を純粋な姿で追うことにはなく、「真実」を発見したり描写したりするときに、それらが果たす役割にある」とパーク (1994, p. 399) は書いている。
- 14) なお、この内容は1978年にジュネーブ大学で開催されたコロキウム「哲学と隠喩」における講演である。
- 15) なお、本書はもともと『BRUTUS』通常版として、ほとんど同じ表紙を用いて、2001年7月2日号 (482号) として発売されたものである。このことについて情報をいただいた土居洋平氏、ならびに現物を貸していただいた西野淑美氏に感謝したい。
- 16) なお、引用箇所が続く文章はあまりにも文脈が違うが重要であるので、ここに記しておく。「それらは、固有名詞の周囲に込み入った空間——ここではそれぞれの述語が、固有名詞の換喩となり、悪魔憑き女を、同じ身元確認のある等価物から別のそれへと通過させるだけの《置き換え》の罫にかけられる空間——を創り出すだろう」(ド・セルトー, 1996, p. 294)。
- 17) なお、偶然ではあるが、田中大介氏が2002年度に筑波大学に提出した未刊の修士論文の一部に、東京駅にまつわる歴史的事実から同様の議論を展開した箇所がある。筆者は、2003年7月12日に開催された社会解釈学研究会で、「東京(駅)の存在論—中心の生成/中心の空虚化」という氏の発表を聞いた。
- 18) 近年の丸の内地区には、海外ブランドのブティックが集積したり、年末に「東京ミレナリオ」のイベントが開催され、「丸の内ビルディング」がリニューアルされるなど、情報誌の意味付けも大きく変っている。
- 19) 本稿はある意味で、Naruse (1997) の続編にあ

たる。この拙稿を受けて発表された大平 (2002) に違和感を感じ、筆者はコメント論文を発表した (成瀬, 2003)。これに対し、大平氏からも返答をいただいたが誤解は解けていない (大平, 2003)。本稿の分析でも分かるように、筆者は決して固有名詞を一般名詞と区別してその「単独性」を主張しているわけではない。

- 20) ここでの考察は、地名の地図上での空間的位置についての認知地図研究と類似した側面を持っている。若林 (1997) を参照されたい。
- 21) 筆者が所有しているものだけでも、ニューヨーク (1983年10月15日号)、イタリア (1989年9月1日号)、ドイツ (1990年2月15日号)、インドネシア・タイ (1990年5月1日号)、トルコ (1997年8月1日号)、ニッポン (1999年2月1日号)、シブヤ (2000年2月15日号) がある。

文 献

- 泉谷洋平 (2003) : 人文地理学におけるポストモダニズムと批判的実在論. 空間・社会・地理思想, 8, pp. 2-22.
- 内田順文 (1993) : 比喩的認識と場所イメージ. 国士館大学文学部人文学会紀要, 26, pp. 51-68.
- 大平晃久 (2002) : カテゴリー化の能力と地名. 地理学評論, 75, pp. 121-138.
- 大平晃久 (2003) : 信念・知識体系の一環としての地名——中島氏と成瀬氏の批判に就いて——. 地理学評論, 76, pp. 180-183.
- 加藤政洋・神田孝治 (1999) : 旅の周縁の空間. 現代思想, 27-13, pp. 127-141.
- クーン, T. S. 著, 中山 茂訳 (1971) : 『科学革命の構造』みすず書房. Kuhn, T. S. 1962. *The structure of scientific revolutions*. The University of Chicago Press, Chicago.
- クーン, T. 著, 富山太佳夫訳 (1981) : 科学における隠喩. 現代思想, 9-5, pp. 80-89. Kuhn, T. S. (1979) : *Metaphor in science*. Ortony, A. (ed.): *Metaphor and thought*. Cambridge University Press, Cambridge.
- クレーマー, L. S. 著, 筒井清忠訳 (1993) : 文学・批評・歴史的想像力——ヘイドン・ホワイトとドミニク・ラカブラの文学的挑戦——. ハント, L. 編, 筒井清忠訳『文化の新しい歴史学』岩波書店, pp. 149-201. Hunt, L. ed. (1989) : *The new cultural*

- history. University of California Press, Berkeley.
- ゴッフマン, E. 著, 石黒 毅訳 (1974): 『行為と演技——日常生活における自己呈示——』誠信書房.
- Goffman, E. (1959): *The presentation of self in everyday life*. Doubleday & Company Inc..
- コント, A. 著, 霧生和夫訳 (1970): 実証精神論. 清水幾太郎編『世界の名著 コント・スペンサー』中央公論社, pp. 141-233. Comte, A. (1844): *Discours sur l'esprit positif*. Garnier Frère, Paris.
- サイード, E. W. 著, 大橋洋一訳 (1998): 『文化と帝国主義 1』みすず書房. Said, E. W. (1993): *Culture and imperialism*. Vintage Books, New York.
- ジジェク, S. 著, 鈴木一策訳 (1996): 『為すところを知らざればなり』みすず書房. Žižek, S. (1991): *For they know not what they do: enjoyment as a political factor*. Verso, London.
- 立岡裕士 (1985): 現代地理学史の分析枠の構築にむけて——Hartshorne パラダイムを例として——. 人文地理, 37, pp. 193-214.
- デイヴィス, M. 著, 村山敏勝・日比野啓訳 (2001): 『要塞都市 LA』青土社. Davis, M. (1990): *City of quarts: excavating the future in Los Angeles*. Verso, London.
- デイヴィッドソン, D. 著, 高頭直樹訳 (1987): 隠喩は何を意味するのか. 現代思想 15-6, pp. 49-69. Davidson, D. (1979): What metaphors mean. Sacks, S. (ed.) *On metaphor*. The University of Chicago Press, Chicago, pp. 29-45.
- デリダ, J. 著, 足立和浩訳 (1972): 『根源の彼方に——グラマトロジーについて——下』現代思潮社. Derrida, J. (1967): *De la grammatologie*. Minuit, Paris.
- デリダ, J. 著, 庄田常勝訳 (1987a): 隠喩の退一引. 現代思想 15-6, pp. 32-48. Derrida, J. (1978): Le retrait de la métaphore. *Po & Sie*, 7.
- デリダ, J. 著, 庄田常勝訳 (1987b): 隠喩の退一引. 現代思想 15-14, pp. 200-221. Derrida, J. (1978): Le retrait de la métaphore. *Po & Sie*, 7.
- ド・セルトー, M. 著, 佐藤和生訳 (1996): 『歴史のエクリチュール』法政大学出版局. de Certeau, M. (1975): *L'écriture de l'histoire*. Gallimard, Paris.
- 富山太佳夫 (1981): 修辞学と物語論——文芸批評と歴史哲学——. 思想, 682, pp. 59-79.
- 成瀬 厚 (1996): 『Hanako』の地理的記述に表象される「東京女性」のアイデンティティ. 地理科学, 51, pp. 219-236.
- 成瀬 厚 (2003): 場所名と記号体系——大平論文に対するコメント——. 地理学評論, 76, pp. 172-175.
- 野澤秀樹 (1992): 地理学史研究の方法——科学哲学・科学史・思想史との係わりにおいて——. 人文地理, 44, pp. 47-69.
- パーク, K. 著, 森 常治訳 (1982): 『動機の文法』晶文社. Burke, K. (1945): *The grammar of motives*. Merian Books, Cleveland.
- パーク, K. 著, ガスフィールド, J. R. 編, 森 常治訳 (1994): 『象徴と社会』法政大学出版局. Burke, K. (Gusfield, J. R. ed.) (1989): *On symbol and society*. Chicago University Press, Chicago.
- バーゼス, E. W. 著, 大道安次郎訳 (1972): 都市の発展——調査計画序論——. パーク R. W., バーゼス, E. W., マッケンジー, R. D. 著, 大道安次郎, 倉田和四生訳: 『都市——人間生態学とコミュニティ論——』鹿島出版会, pp. 49-64. Park, R. E., Burgess, E. W. and McKenzie, R. D. (1925): *The city*. The University of Chicago Press, Chicago.
- バルト, R. 著, 佐藤信夫訳 (1972): 『モードの体系——その言語表現による記号学的分析——』みすず書房. Barthes, R. (1967): *Système de la mode*. Seuil, Paris.
- バルト, R. 著, 宗 左近訳 (1974): 『表徴の帝国』新潮社. Barthes, R. (1970): *L'empire des signes*. d'Art Albert Skira, Geneve.
- フライ, N. 著, 海老根宏・中村健二・出淵 博・山内久明訳 (1980): 『批評の解剖』法政大学出版局. Frye, N. (1957): *Anatomy of criticism: four essays*. Princeton University Press, Princeton.
- ペッパー, S. 著, 永山将史訳 (1987): 哲学におけるメタファー——哲学的思惟の起源と展開過程についてのメタフォリカル・アプローチ——. フレッチャー, A. 他著, 高山 宏他訳: 『アレゴリー・シンボル・メタファー』平凡社, pp. 150-174. Wiener, P. P. ed. (1973): *Dictionary of the history of ideas: studies of selected pivotal ideas*. Macmillan, New York.
- ベルグソン, H. 著, 平井啓之訳 (1975): 『時間と自由』白水社. Bergson, H. (1889): *Essai sur les données immédiates de la conscience*. Presses Universitaires de France, Paris.
- マラン, L. 著, 梶野吉郎訳 (1995): 『ユートピア的な

- もの——空間の遊戯——』法政大学出版局。Marin, L. (1973): *Utopiques: jeux d'espaces*. Minuit, Paris.
- マンハイム, K. 著, 鈴木二郎訳 (1968): 『イデオロギーとユートピア』未来社。Mannheim, K. (1929): *Ideologie und Utopie*. Friedrich Cohen, Bonn.
- ラカプラ, D. 著, 山本和平・内田正子・金井嘉彦訳 (1993) 『思想史再考——テキスト, コンテクスト, 言語——』平凡社。LaCapra, D. (1983): *Rethinking intellectual history: texts, contexts, language*. Cornell University Press, Ithaca.
- リクール, P. 著, 久米 博訳 (1984): 『生きた隠喩』岩波書店。Ricoeur, P. (1975): *Le métaphore vive*. Seuil, Paris.
- 若林芳樹 (1997): 空間的知識の階層構造と認知地図の歪み, 中村和郎編: 『地理学「知」の冒険』古今書院, pp. 41-61.
- 若林芳樹 (1999): 『認知地図の空間分析』地人書房。
- Barnes, T. J. (1992): Reading the texts of theoretical economic geography: the role of physical and biological metaphors. Barnes, T. J. and Duncan, J. S. (eds.): *Writing worlds: discourse, texts and metaphor in the representation of landscape*. Routledge, New York, pp. 118-135.
- Barnes, T. J. and Duncan, J. S. (1992): Introduction: writing worlds. Barnes, T. J. and Duncan, J. (eds.): *Writing worlds: discourse, texts & metaphor in the representation of landscape*, Routledge, New York, pp. 1-17.
- Berdoulay, V. (1981): The contextual approach. Stoddart, D. R. (ed.): *Geography, ideology and social concern*. Basil Blackwell, London, pp. 8-16.
- Black, M. (1962): *Models and metaphors*. Cornell University Press, Ithaca.
- Buttimer, A. (1993): *Geography and the human spirit*. The Johns Hopkins University Press, Baltimore.
- Cresswell, T. (1997): Weeds, plagues, and bodily secretions: a geographical interpretation of metaphors of displacement. *Annals of the Association of American Geographers*, 87, pp. 330-345.
- Daniels, S. and Cosgrove, D. (1993): Spectacle and text: landscape metaphors in cultural geography. Duncan, J. and Ley, D. (eds.): *Place/culture/representation*, Routledge, London, pp. 57-77.
- Duncan, J. S. (1996): Me(trope)olis: or Hayden White among the urbanists. King, A. D. (ed.): *Re-presenting the city: ethnicity, capital and culture in the 21th-century metropolis*. Macmillan, London, pp. 253-268.
- Livingstone, D. N. and Harrison, R. T. (1980): The frontier: metaphor, myth, and model. *The Professional Geographer*, 32, pp. 127-132.
- Livingstone, D. N. and Harrison, R. T. (1981): Meaning through metaphor: analogy as epistemology. *Annals of the Association of American Geographers*, 71, pp. 95-107.
- Mills, W. J. (1982): Metaphorical vision: changes in Western attitudes to the environment. *Annals of the Association of American Geographers*, 72, pp. 237-253.
- Naruse, A. (1997): A note on the concept of place. *Geographical Reports of Tokyo Metropolitan University*, 32, pp. 59-68.
- Pepper, S. C. (1942): *World hypotheses: a study in evidence*. University of California Press, Berkeley.
- Ricoeur, P. (1979): The metaphorical process as cognition, imagination, and feeling. Sacks, S. (ed.): *On metaphor*. The University of Chicago Press, Chicago, pp. 141-157.
- Sacks, S. ed. (1979): *On metaphor*. The University of Chicago Press, Chicago.
- Smith, J. M. (1996): Geographical rhetoric: modes and tropes of appeal. *Annals of the Association of American Geographers*, 86, pp. 1-20.
- Smith, N. and Katz, C. (1993): Grounding metaphor: towards a spatialized politics. Keith, M. and Pile, S. (eds.) *Place and the politics of identity*. Routledge, New York, pp. 67-83.
- Tuan, Yi-Fu. (1978): Sign and metaphor. *Annals of the Association of American Geographers*, 68, pp. 363-372.
- White, H. (1973): *Metahistory: the historical imagination in nineteenth-century Europe*. The Johns Hopkins University Press, Baltimore.

(受付: 2003年11月4日)

(受理: 2004年2月23日)

A Grammar of Places: an Analysis of City Guide

NARUSE Atsushi

Key words: metaphor, trope, place name, city guide, Tokyo

This paper consisted of two parts. In the first part, I overviewed some studies of histories of geography. These studies paid attentions to the linguistic figurations (trope, rhetoric and metaphor) of academic descriptions, and pointed out that the forms of the past geographical works deeply intertwined the contents as the academic insistences and that behind the adoption of the specific form, the particular ideological implication did existed. The aim of this paper was to apply these arguments to the popular geographic descriptions outside academy. Though these studies focused the textualities of historical works, I centered the smaller tropes as level of one sentence. This was caused by my interest what kind of role place name as a noun plays in a sentence grammatically, and by critical comments toward the arguments about tropes. These critical comments were that the explanations about metaphor were inevitably metaphorical, and that the ideas which metaphor is needed to express a new insight assumes the meaning of a word.

The second part of this paper is an analysis of the popular geographical descriptions. The object of this study is the city guide, *Tokyo Sightseeing* published by Japanese publisher, Magazine House Inc. in 2002. It has characteristics of magazine and tourist guide. This text which described Tokyo as a city in English and Japanese and supposed readers of foreigners in Japan was constituted from the lot of sentences. These sentences were that the names which ranged from proper to general referred the various geographical objects from state to city and to facilities.

The word of place as a general name was used as a spot to do something concrete. Place names as proper name (Odaiba, Shibuya, Roppongi) were used the destination of public transportation and the area where the reader walks around. In these description of specific behavior, Tokyo as a word of city was not appeared. On the other hand, at the moment that the shocks the foreign tourist encountered transformed into the recognition of cultural differences, national cultures were appeared. As a notion of national culture has a different abstract level from cartographic recognition, it was used against the idea that the name of smaller geographical scale appears easily in the sentence which expresses our familiar behavior. Between place and national culture, the word, Tokyo situated a position of the title of this text as a proper name which is able to displace the word of city as a general name, and became a *Mater-Signifier*.